特別支援教育の扉 №５０　　令和５年５月１６日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

保護者の心を支えよう

園や学校では、保護者にどのように子どもの困り感を伝え、専門機関や教育相談につなげたらよいか悩むことがあると思います。そこで、保護者の心を支えるポイントを紹介します。

１　保護者が専門機関や教育相談に応じない理由

①子どもの状況をよく理解していない。
②母親は気付きながらも認められない家庭事情がある。（祖父母の存在、父親との考えの相違等）
③気付いていても、認めたくない、あるいは「いつか治る」と期待感をもっている。

２　保護者に心の変化を起こさせるためには

子どものつまずき（よくないこと）を伝えるためには、保護者との信頼関係が必要となります。保護者が求めているのは、「担任や園（学校）が我が子のために、これだけ一生懸命にやってくれている」という実績です。ポイントは「安心感」と「信頼感」をどう起こさせるかにかかっています。

（１）安心感・・・個別の配慮は、我が子を特別視し排除するものではない。
（２）信頼感・・・個別の配慮は、成果が上がり、子どもに成長が見られる。

この二つのことを納得しないと保護者の心は動きません。学級担任への信頼があって初めて保護者の心は動きます。そのためには、園（学校）全体で学級担任を支える体制づくりが重要です。

３　保護者面談のポイント（人は説得されて動くのではなく、納得して動く）

・面談のねらい、始めと終わりの時間を伝える。（父親の参加も促す）
・話すより能動的に聴く。（聴いてくれる人に信頼を寄せる）
・大事なことを伝えるときは複数で対応する。（連帯感が安心感になる）
・情報提供をするが結論は急がない。（早急な助言は反発を招く、結論は相手に言ってもらう）
・共感と肯定的な表現を心掛ける。（共感する人に心を開く、頑張りやよいところを伝える）
・少しでもかみ合う部分を探す。（表情・言葉の変化を読み取る、ユーモアも交える）
・就学や進路と結び付ける。（常識にとらわれない、うまくいった事例を紹介する）
・細かい記録は取らず、キーワードをメモする。（なるべく聴くことを大切にする）

保護者が子どもの困り感を理解できると、我が子を見る目が変わり、叱る回数が減ります。保護者と園（学校）が子どもを理解して相互協力ができると、子どもの行動が改善されます。教育相談につなぐためには、父親の参加を促したり、担任が同行したりすることも必要です。

とれたて直送便

○自己肯定感を高める支援（些細なことで自信をなくしてしまう子どもへの対応）

①「私は周りに認められている、受け入れられている」という感覚をもてるように、子どもの話を肯定的な雰囲気で聴く。
②周りの評価を気にしすぎないように、他者との比較ではなく、できなかったことができるようになったという「自己成長感」を実感できる機会を意図的に盛り込む。
③友達からの評価は、即効性と持続性があるので、その子の特技を生かした役割や活躍の場を用意し、友達から「ありがとう」と感謝される経験を重ねる。
④結果だけを意識すると失敗した際「自分はダメだ」と感じるので、努力している過程を認め、「結果はダメでもよく頑張った」と、ポジティブに捉えられるようにする。

一つの長所があれば、それをほめて伸ばすだけで子どもは頑張れます。大切なことは、短所をなくすのではなく、その子だけの長所を見付けて伸ばすことです。